

令和 6 年 5 月 17 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：17K03274

研究課題名（和文）中国社会主義体制下モンゴル牧畜民女性の都市化過程における社会進出と生活経験

研究課題名（英文）Urban Migration and Life Experiences of Pastoralist Women under the Socialist Regime in China

研究代表者

児玉 香菜子（児玉香菜子）（KODAMA, Kanako）

千葉大学・大学院人文科学研究院・准教授

研究者番号：20465933

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：中国社会主義体制下におけるモンゴル人女性の都市移住と生活経験をオーラルヒストリーによって収集整理し、日本語とモンゴル語にて出版公開した。都市移住要因は主に配偶者や自身の進学就労転勤で、その背景には教育の普及がある。人民公社期は食生活はじめ生活に大きな変化を与えるものであったが、その後の人生にも、とりわけ進学、就職に関して大きな影響を与えている。大都市ではモンゴル語による教育機関が限られていたことから、中国語を選択せざるを得ず、第2世代の母語は多くが中国語になっていた。都市の生活経験については、子どもの教育言語、育児、コミュニティ、親族関係が大きく変化していることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

オーラルヒストリーによる都市に移住したモンゴル人女性たちの語りから、通時的なモンゴル地域の社会、文化とその変化、国家の現代史の一端を描き出したことである。とりわけ、現在再検討が進んでいる中国社会主義集団経済下における人びとの暮らしを詳細に記録したことの意義は大きい。また、都市移民の第2世代、退職後のモンゴル人女性の生活といった中国の現在を描き出している。

研究成果を日本語だけでなく、モンゴル語で公開出版することで、その成果を聞き取り対象者および対象社会にも還元した。

研究成果の概要（英文）：The urban migration and life experiences of Mongolian women under the Chinese socialist regime were collected through oral histories and published in Japanese and Mongolian. The main reasons for urban migration were the husbands and their own higher education, employment, and job transfers, with the spread of education as a background factor. In addition to daily life and its changes, such as eating habits, the People's Communes significantly impacted their later life, especially in terms of higher education and employment. The mother tongue of most of the second generation was Chinese because of the limited number of Mongolian-language educational institutions in Beijing and Hohhot. Regarding urban living experiences, the study revealed significant changes in children's education, language, childcare, community, and kinship.

研究分野：文化人類学

キーワード：モンゴル人女性 オーラルヒストリー 都市進出 中国 戸籍制度 教育言語 育児 コミュニティ

1. 研究開始当初の背景

ソ連が崩壊して30年を経た現在、70年以上におよぶ社会主義を実際に経験した人びとの語りによるモンゴル国の社会主義の再検証が進んでいる。他方で、中国はソ連などの旧社会主義国より社会主義国家として成立するのが1949年と遅い。その後、1957年から始まる反右派闘争、大躍進、文化大革命による政治的混乱がつづく。文化大革命が終息する1978年、中国はその国家体制を、社会主義を掲げ中国共産党の一党独裁を維持した形で、市場経済に転換する。このように中国の市場経済化は他の社会主義国より10年以上も早いものであった。よって、中国の社会主義集団化の経験はわずか30年にすぎない。そのため、中国については、社会主義経験を現在の「社会主義市場経済化」をも射程に置いて研究する必要性が指摘されている。こうしたなかで、内モンゴルの社会主義経験に関する研究は小長谷による牧畜研究と牧畜地域を対象としたオーラルヒストリー研究が牽引してきた。中国の社会主義時代についての研究は文化大革命を中心に楊海英が精力的にとりくみ、分厚い蓄積がある。しかしながら、モンゴル研究および中国研究という枠組みでも、少数民族である内モンゴル族女性の都市化プロセス、社会進出と生活経験を扱った研究はほぼない。また自伝や手記が出版公開されつつあるが、政治的に著名な人物に限られているのが現状である。

2. 研究の目的

本研究の目的は中国社会主義集団経済と社会主義市場経済化を経験してきたモンゴル牧畜民女性の都市進出過程と都市での生活経験を、オーラルヒストリーにより具体的に明らかにすることである。研究対象の都市として北京市と内モンゴル首府フフホト市を主にとりあげる。中国では戸籍制度によって、自分の出身地以外での就職または居住が厳しく制限され、実質的に自由な居住移動はほとんど不可能であった。他方で、中国の社会主義集団化体制は相対的に短期間であったが、その間に大都市には多くの行政機関が設置されるとともに、中央民族大学、内モンゴル大学をはじめとした高等教育機関が整備され、新聞出版社や民族企業等が設立されている。これによって、少なくないモンゴル族が職を得て、都市で暮らすようになる。まず、どのような形で都市移住がなされたのか、その具体的プロセス、意思決定を詳細に把握する。

次に、都市での生活経験である。中国には都市特有の状況がある。それは毛沢東によって推進された多産推奨から一転、1979年より人口抑制策として実施された一人っ子政策である。一人っ子政策は都市に暮らす少数民族にも適応された。また、フフホトと北京市ではモンゴル語による教育機関が限られているため、子女の教育言語をどうするのかという民族教育の問題がある。これらの課題はモンゴル国にはないものである。こうしたなかで結婚、出産、育児はどのように変化したのか。家族や公的サポート、子女の教育言語の選択、コミュニティのあり方を明らかにする。

3. 研究の方法

都市在住モンゴル人女性へのオーラルヒストリーを収集し、整理分析公開する。これまで共同でオーラルヒストリー研究を進めてきた中央民族大学サラングレル教授を研究協力者とする。対象とするのは1950年以降、フフホト市や北京市などの大都市をはじめ都市に生活拠点をもちよくなったモンゴル人女性たちである。できるだけ幅広い年代、出身地域、職業から聞き取り

およびオーラルヒストリー収集をおこなう。これらをもとにモンゴル語と日本語で出版公開する。

2018年度に聞き取り調査、2019年度に研究協力者であるサランゲレル教授を日本に招へいした。しかしその後の COVID-19 の世界的な流行の中、中国は入国後に長期の待機期間を設けていたことに加え、厳しいゼロコロナ政策とその後の感染爆発により、中国の共同研究者も国内での移動が大きく制限された。調査対象者が SNS にあまりなじまないということもあり、コロナ禍では当該研究に必要な新規の聞き取りはもとより、再度の聞き取りは実質的に中止せざるを得なかった。他方で、ペンシルベニア大学アトウッド教授を研究協力者とし、アメリカとモンゴル国で資料収集をおこなうとともに、これまでの聞き取り資料の整理公開を進めるとともに、英語への翻訳に取り組むことにした。コロナ禍で実施した調査については、記録という観点から「コロナ禍のフィールドワークと海外研修」という特集を組み、報告をまとめた。

2023年度に北京市で再度の聞き取り調査を実施し、その後研究協力者のサランゲレル教授を千葉大学に招へいし、モンゴル語と日本語版のオーラルヒストリーを出版公開した。

4. 研究成果

(1) オーラルヒストリーの収集公開

聞き取りを行った都市在住モンゴル人女性のオーラルヒストリーを順次日本語に翻訳公開した。最終年の 2023 年度に『千葉大学ユーラシア言語文化論集』別冊にてこれまで翻訳公開した 6 人のオーラルヒストリーにモンゴル語を加えて出版公開した。

これまで公開したモンゴル人女性はフフホト在住と盟旗在住の女性 2 人と北京在住の女性 1 人の計 6 名である。中国の都市の特徴は首都北京市をはじめ、内モンゴル自治区首府であるフフホト市といった大都市から、盟、自治州中心の中都市、旗中心の小都市があり、移住先としての都市は 1 つではなく、その規模という点でも多層性があることである。都市への進学から都市への就労といっても、その就労先がフフホト市や北京市であるとは限らない。多くが大都市での進学を終えたのちに、出身の盟、旗に就労している。よって、これらの特徴をふまえて、6 名のライフヒストリーをフフホト在住、盟旗中心在住と北京在住に分け、3 部構成としている。これら 6 人の女性のオーラルヒストリーは、モンゴル地域の社会、文化の歴史であるとともに、国家の現代史としても貴重な一次資料でもある。

再度の聞き取り調査ができていないために、未公開になっているものが複数あり、これらについては今後順次公開していく予定である。英語版については未公開のものとあわせて出版公開を考えている。

(2) オーラルヒストリーからみる人民公社期の生活

都市移住前後における人民公社期の生活について詳細に語られており、人民公社期の牧畜、農業などの生産活動だけでなく、食生活など日々の生活に加え、結婚とその変化、教育について知ることができる。人民公社期がその後の人生、とりわけ進学、就職に関して大きな影響を与えていることが明らかになった。

(3) 都市進出の背景

聞き取りしたモンゴル人都市在住女性の職業は公務員、保育士、スポーツ選手、教師、大学教員、ウランムチルの歌手からレストラン経営への転身である。その都市進出の要因は大きく都市居住男性との婚姻、配偶者もしくは自身の進学とその結果による都市への就職である。都市進

出において共通している点として、公開した 6 人のモンゴル人女性ははじめ他の聞き取りでも世代や出身地が異なるにもかかわらず、時代の混乱を挟むものの、中国における教育の普及と就労、男女平等思想があることが明らかになった。教育の普及により、自身の進学や就職機会が地方出身者にも開けるとともに、結婚による都市進出においても、都市での就職を可能にしている。さらに、第 1 次産業に対するネガティブな評価、中国の戸籍制度とのかかわりからによる都市進出に対する積極的評価も背景として指摘できる。一方で、進学意欲が高く、日本留学や大学進学を目指していたものの、当時の事情により進学を断念していることも多くに共通していた。

(4) 都市移住女性の生活経験

都市生活における大きな変化の一つに子どもの教育言語の漢語選択がある。漢語が選択されていた理由の一つとして、とくに北京市やフフホト市などの大都市での子どもの保育環境がある。都市での育児においては、地方に暮らす家族の支援を受けるのではなく、職場が提供する幼稚園が大きな役割を果たしていた。この幼稚園が漢語で教育を行っていたのだ。小学校以降の子どもの教育言語選択においても大都市ではモンゴル語による教育機関が限られていたことから、中国語を選択せざるを得ず、第 2 世代の母語は多くが中国語になっていた。

フフホト市と北京市では公務員や大学教員の場合、住居は就労先から提供されるため、地縁や血縁による空間的コミュニティは形成されにくい状態にある。一方で、大都市の学校に進学してきた親族を受け入れる事例がみられた。これは先に都市進出を果たした親族が他の親族、とくに下の世代の都市進出を支えることにつながっている。

都市のコミュニティや人間関係としては、大学の同級生や同僚が公的な面だけでなく、出産、育児においても重要な役割を果たしていることが明らかになった。最終年に公開した女性は 50 代の退職後に北京市に移住し、モンゴル料理レストランをオープンさせ、成功を収めたもので、北京におけるモンゴル人コミュニティの一端を示すものである。

地方との関係でみると、当時は現在と異なり、交通手段及び通信手段が非常に劣悪で、進学や就職、結婚などによる都市への移住は生活および家族関係に大きな変化をもたらすものであった。他方で、現在、交通インフラ整備が進み、地方と都市の往来が容易になり、大都市に暮らす共働き世帯の孫たちの面倒をみるために祖母が都市移住するという現象も確認されている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計23件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 6件 / うちオープンアクセス 20件）

1. 著者名 児玉香菜子、サランゲレル	4. 巻 2
2. 論文標題 中国都市在住モンゴル人女性のオーラルヒストリー	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 千葉大学ユーラシア言語文化論集 別冊	6. 最初と最後の頁 1-182
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 サランゲレル、児玉 香菜子	4. 巻 25
2. 論文標題 都市在住モンゴル人女性のオーラルヒストリー(6) : マヌ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 千葉大学ユーラシア言語文化論集 = Journal of Chiba University Eurasian Society	6. 最初と最後の頁 205 ~ 222
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20776/S21857148-25-P205	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 児玉 香菜子	4. 巻 25
2. 論文標題 『オールドス民話収集』(7) : 銭世英著、1999 年、フフホト	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 千葉大学ユーラシア言語文化論集 = Journal of Chiba University Eurasian Society	6. 最初と最後の頁 223 ~ 249
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20776/S21857148-25-P223	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 サランゲレル・児玉香菜子	4. 巻 24
2. 論文標題 都市在住モンゴル人女性のオーラルヒストリー（5）ツァヤンジ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 千葉大学 ユーラシア言語文化論集	6. 最初と最後の頁 341-348
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20776/S21857148-24-P341	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 児玉香菜子	4. 巻 24
2. 論文標題 『オールドス民話収集』(6) 銭世英著、1999年、フフホト	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 千葉大学 ユーラシア言語文化論集	6. 最初と最後の頁 349-376
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20776/S21857148-24-P349	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 児玉香菜子	4. 巻 9
2. 論文標題 児玉香菜子のアフロ・ユーラシア文明現代動態論	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明	6. 最初と最後の頁 79-86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 児玉香菜子	4. 巻 4
2. 論文標題 人民公社解体後のラクダの減少とその要因	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中央アジア牧畜社会研究叢書	6. 最初と最後の頁 9-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 児玉香菜子	4. 巻 4
2. 論文標題 5年間の研究成果：中国におけるラクダ頭数変化とその要因	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中央アジア牧畜社会研究叢書	6. 最初と最後の頁 71-74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 KODAMA Kanako	4. 巻 4
2. 論文標題 Photo essays for 2019 field work	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中央アジア牧畜社会研究叢書	6. 最初と最後の頁 87
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 KODAMA Kanako	4. 巻 4
2. 論文標題 Photo essays in 2018	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中央アジア牧畜社会研究叢書	6. 最初と最後の頁 93-94
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 児玉香菜子	4. 巻 24
2. 論文標題 序 特集 コロナ禍の海外研修・フィールドワークによせて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ユーラシア言語文化論集	6. 最初と最後の頁 117-123
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 児玉香菜子	4. 巻 24
2. 論文標題 コロナ禍のアメリカ渡航	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ユーラシア言語文化論集	6. 最初と最後の頁 265-286
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20776/S21857148-24-P265	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 サラングレル・児玉香菜子	4. 巻 23
2. 論文標題 都市在住モンゴル人女性のオーラルヒストリー(4) : オユングレル	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 千葉大学ユーラシア言語文化論集	6. 最初と最後の頁 77-87
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20776/S21857148-23-P77	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 児玉香菜子	4. 巻 23
2. 論文標題 『オールドス民話収集』(5) : 銭世英著、1999年、フフホト	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 千葉大学ユーラシア言語文化論集	6. 最初と最後の頁 89-111
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20776/S21857148-23-P89	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 児玉香菜子訳	4. 巻 22
2. 論文標題 『オールドス民話収集』(4) 銭世英著、1999年、フフホト	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 千葉大学ユーラシア言語文化論集	6. 最初と最後の頁 389-408
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 サラングレル・児玉香菜子・白Xiao梅	4. 巻 22
2. 論文標題 都市在住モンゴル人女性のオーラルヒストリー(3) インチュン	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 千葉大学ユーラシア言語文化論集	6. 最初と最後の頁 375-387
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 児玉香菜子	4. 巻 23
2. 論文標題 モンゴル牧畜文化をまなぶ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Field+ : フィールドプラス : 世界を感応する雑誌	6. 最初と最後の頁 20-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 サランゲレル・児玉香菜子	4. 巻 21
2. 論文標題 都市在住モンゴル人女性のオーラルヒストリー (2) ジンファー	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 千葉大学ユーラシア言語文化論集	6. 最初と最後の頁 175-180
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 児玉香菜子	4. 巻 21
2. 論文標題 『オールドス民話収集』 (3) 銭世英著、1999年、フフホト	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 千葉大学ユーラシア言語文化論集	6. 最初と最後の頁 181-199
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 児玉香菜子	4. 巻 23
2. 論文標題 モンゴル牧畜文化をまなぶ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Field+ : フィールドプラス : 世界を感応する雑誌	6. 最初と最後の頁 20-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 児玉香菜子	4. 巻 8
2. 論文標題 2019年度研究調査報告	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明	6. 最初と最後の頁 75-77
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 サランゲレル・児玉香菜子	4. 巻 20
2. 論文標題 都市在住モンゴル人女性のオーラルヒストリー(1)ダリマ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 千葉大学ユーラシア言語文化論集	6. 最初と最後の頁 323-339
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 児玉香菜子	4. 巻 20
2. 論文標題 「『オールドス民話収集』(2) 銭世英著、1999年、フフホト」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 千葉大学ユーラシア言語文化論集	6. 最初と最後の頁 341-361
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 児玉香菜子
2. 発表標題 オーラルヒストリーからみるモンゴル牧畜民女性の大都市進出過程とその背景 中国フフホト市の事例から
3. 学会等名 日本モンゴル学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 児玉香菜子
2. 発表標題 移動牧畜と定住牧畜の比較 寒冷、モンゴル高原の事例から
3. 学会等名 科研合同研究会「西アジアと中央アジアの牧畜 それぞれのフィールドから 」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 児玉香菜子
2. 発表標題 モンゴル牧畜起源試論とラクダ牧畜
3. 学会等名 第5回「中央アジア牧畜社会動態研究」研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 児玉香菜子
2. 発表標題 中国モンゴル牧畜民定住化政策と社会的文化的影響
3. 学会等名 第4回「中央アジア牧畜社会動態研究」研究大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 児玉香菜子
2. 発表標題 ラクダ牧畜の現在 内モンゴル額済納旗調査報告
3. 学会等名 第二回ワークショップ「ヒト 動物関係の諸相 人類史における家畜化のプロセスを考える」
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計10件

1. 著者名 今村薫編 / 児玉香菜子	4. 発行年 2023年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 262
3. 書名 中央アジア牧畜社会	

1. 著者名 今村薫編 / 児玉香菜子	4. 発行年 2023年
2. 出版社 風響社	5. 総ページ数 232
3. 書名 ラクダ、苛烈な自然で人と生きる	

1. 著者名 児玉香菜子編	4. 発行年 2023年
2. 出版社 アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明の近代動態分析 「近代世界システム」との相克 (科学研究費補助金基盤A:研究代表 嶋田義仁) 中部大学中部高等学術研究所、	5. 総ページ数 404
3. 書名 アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明研究叢書 18 赤木祥彦博士 沙漠研究コレクション	

1. 著者名 今村薫編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 名古屋学院大学現代社会学部文化人類学研究室	5. 総ページ数 88
3. 書名 「自然適応と牧畜」中央アジア牧畜社会研究叢書3	

1. 著者名 児玉香菜子編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 千葉大学大学院人文公共学府	5. 総ページ数 144
3. 書名 千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書367号 環境変動下における牧畜民の定住化	

1. 著者名 児玉香菜子編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 千葉大学大学院人文公共学府	5. 総ページ数 147
3. 書名 環境変動下における先住民の文化芸術・継承活動とその変遷 人文公共学府研究プロジェクト報告書	

1. 著者名 今村薫編 児玉香菜子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 名古屋学院大学総合研究所	5. 総ページ数 121
3. 書名 中央アジア牧畜社会研究叢書2 遊牧と定住化	

1. 著者名 薩仁格日勒編・朝格吐編・児玉香菜子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 民族出版社	5. 総ページ数 617
3. 書名 蒙古民俗文化研究	

1. 著者名 今村薫編・児玉香菜子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 名古屋学院大学総合研究所	5. 総ページ数 113
3. 書名 中央アジア牧畜社会研究叢書 1 牧畜社会の動態	

1. 著者名 .	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Tod nomin gerel tob	5. 総ページ数 204
3. 書名 x tyyx	

〔産業財産権〕

〔その他〕

千葉大学文学部 教員要覧 https://www.l.chiba-u.jp/applicants/teachers/kanako_kodama.html 千葉大学文学部 教員要覧 https://www.l.chiba-u.jp/applicants/teachers/kanako_kodama.html
--

6. 研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	サランゲレル (Sarengerile)	中央民族大学	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	アトウッド クリストファー (Atwood Christopher)	ペンシルベニア大学	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
中国	中央民族大学			
米国	ペンシルベニア大学			